

令和4年度 東はりま特別支援学校 学校評価結果

実施期間：12月1日(木)～9日(金) 職員・保護者

設問	重点	項目	担当校務部	評価項目	職員評価		保護者評価		成果と課題	外部関係者評価
			関連する取組		昨年度	今年度	昨年度	今年度		
この こども の 育ち を 実 感 す る 学 校 づ くり	教育課程 授業改善 生きる力 主体的・対話的 深い 学び		(教務部) 各教科等の年間計画作成 学習指導要領に基づく授業計画	児童生徒の発達段階をふまえ、小中高の縦のつながり、連携を考えた授業の充実を図っている。	3.0	3.0	3.5	3.4	年間指導計画については、教科・領域の目標が明確になるように新様式を作成し、来年度に向けて各学部で記入練習を行った。実態の再確認と担当者間で目標、支援方法の情報共有を行い、授業に生かすことができた。12年間のタテのつながりが意識できるように年間指導計画(12年間)の提案を行い、来年度以降作成予定である。記入内容、活用方法については来年度十分に検討する必要がある。	【評価できる点】 ・「自立活動」は特別支援教育の根幹となる活動の1つである。数年前の学校評議員会資料には、「自立活動」の文字がほとんど見られなかったが、今回の資料にはたくさん触れられており、充実した取組になっている。努力を重ねており、変化を感じた。 ・コロナ禍で本当に試行錯誤をこらしながら様々な取組を行っていることが読み取れた。頭が下がる ・教務部、支援部、研究研修部が連携して研修会を開いており、学校の1つの組織体として関係部局が連携して動いていることが見えた。 ・12年間というスパンで子どもの成長を見ていこうと実行していることはとても良い。 ・個別の指導計画、個別の教育支援計画の保護者評価が高いということは、保護者は手応えを感じているということである。この流れを大事にしてほしい。 ・進路実現で「進路指導部だより」を年4回発行したり、いろいろな施設見学を積極的に行って保護者に情報提供している点は、すばらしい。 ・社会の大きな変化や法律が変わっていく中でのいろいろな取り組みが行われていることが多く、それに対応している学校は大変だと実感している。
			(教務部) 教育活動全般	確かな学力と豊かな心を育むと共に、生きる力を身につける指導に取り組んでいる。	3.2	3.2	3.2	3.3	コロナ禍ではあったが、学習内容や実施方法を変更して、学習活動や行事運営を概ね行うことができた。交流においても、居住地域交流や学校間交流は3年ぶりに再開し、高等部の共同作品制作の交流も対面で行うことができた。教育活動の様子は、家庭・地域向けに、ブログ等で情報発信を行うことができた。	
			(研究研修部) 授業研究 講師招聘による研修会	児童生徒の実態を把握しつつ、主体的・対話的で深い学びを意識した授業改善に取り組んでいる。	3.1	3.1			コロナ禍のために職員全員が集まるための研修を実施することができず、各学部での研修会に専門家を講師として招聘し、研修会を実施した。職員全体にも希望者を募って参加できるようにし、参加できなかった職員はビデオ撮影したものを各自で視聴するなどして研修を実施した。来年度もさまざまな講師を招聘して研修をしたいとの希望があるが、予算が削減されたためかなり縮小せざるを得ない現状がある。	
	体験活動		(各学部) 校外学習 地域清掃 フェスタ 宿泊学習 自然体験学習	校外での体験活動を通して、社会生活を送るうえで必要なスキル(挨拶や交通ルール、公共のマナー)を育てている。	3.0	3.3	3.4	3.5	新型コロナウイルス感染症対策を講じたうえで、校外学習や泊をとまなう学習を実施することができ、ルールやマナーを守る学習に体験的に取り組むことができた。	
			(総務部・各学部) 学校行事 学部・学年行事 学級活動	児童生徒の実態を踏まえ、行事の精選と内容を検討し、活動の充実に向けている。	3.2	3.3			(総務部・各学部)コロナ感染対策を取り、参観人数の調整を行いながら、参観日や芸術鑑賞会、フェスタなどの学校行事を行うことができた。フェスタの日程についてはあと2年間続け、再検討する予定である。	
	教員の専門性		(研究研修部・支援部) 研究授業 初任者校内研修 校内教員による研修会 教材展 スクールカウンセラーによる研修会	授業研究や専門家に学ぶ機会を設け、特別支援教育の専門性向上に努めている。	3.2	3.3			各学部で研究授業を実施し、事前・事後研修を通じて教員の授業力向上を図った。初任者の校内研修を計画的に行った。夏休みには各学部から工夫を凝らした教材を出品展示する教材展を実施し、その中からピックアップした教材の使用法や使用場面を共有する「語らう会」を今年度も実施した。3学期には各学部での実践を発表する全体研修会を3年ぶりに実施し、他学部の実践を知る機会を設けた。(支援部)教材展では研究研修部と協働で地域の学校園にも公開し、多くの先生方に見学してもらった。カウンセリングマインド研修では児童生徒の卒業後の生活も見据えた支援について学ぶことができた。	
			(情報部) 情報研修 ICT(タブレット端末・電子黒板)活用授業	ICTに関する研修により、知識や活用の幅を広げると共に、情報モラルについても指導している。	3.0	3.1	3.2	3.2	研修などで各学部のニーズに合わせて情報機器の使い方などの研修を行った。少しずつ授業でICT機器を活用する教員が増え始めているが、視覚支援としての活用に留まっていることが課題である。児童生徒がICT機器を活用して展開できる授業内容を検討する必要があると思うが、操作できる児童生徒は、一部であり、現状の授業体制に導入するには課題が多い。使用できるソフト(アプリケーション)にも限りがあるなどの課題も見られる。	
	い の ち と 人 権 を 大 切 に す る 学 校 づ くり	健康、食育	(保健部) 食育 保護者との連携、給食指導	健やかな体づくりに向けて、栄養教諭・保護者と連携し学校教育全般を通して食育に取り組んでいる。	3.4	3.5	3.6	3.6	日々の献立を通じて栄養面、地域性、文化面を学ぶ機会となるよう働きかけている。また、校内での情報共有に努めるとともに、家庭と直接又は間接的な連携にも力を注いでいる。食育は年間計画を通じ、計画的に実施できるよう取り組んでいる。	
			(管理図書部) 状況(火災・地震・津波)を想定した訓練 不審者対応訓練(警察署員招聘) 引き渡し訓練	児童生徒引き渡し訓練実施等、災害対応に取り組んでいる。また、他の防災マニュアルについても随時見直し、危機管理体制の充実を図っている。	3.3	3.3	3.6	3.6	児童生徒引き渡し訓練では、カードの記入・回収を行い、手順に慣れることができた。避難訓練(火災)では、水消火器訓練を行い、防災意識の向上を図った。不審者対応訓練(校内)では、教師の不審者への対応を警察官の指導を受けた。その指導・助言を受け、「緊急対応マニュアル(不審者)」を改訂した。避難訓練(地震)では、停電やガラス飛散などの被害を想定し、障害物を避けて避難する訓練を行った。	
	信 頼 に 応 え る 学 校 づ くり	個人情報保護	(情報部) 個人情報の管理 USB等によるデータ管理の遵守 取り扱いファイル規定に基づく情報管理	個人情報保護の観点に基づき、児童生徒や保護者に関する情報など、情報の管理を適切に行っている。	3.4	3.4	3.5	3.6	個人情報を含む内容は、原則USBや外付けハードディスクなどの記憶媒体に保存しないことを伝えている。各教室に配当できるようデジタルカメラを準備し、個人のスマートフォンで児童生徒の様子を写真に撮らないよう伝えたことで、個人情報漏洩のリスクをさらに軽減できた。	
			(支援部) 個別の教育支援計画 個別の教育支援計画の作成 目標の共有・連携・実態把握 合理的配慮の合意形成	本人・保護者の願いに基づき、合理的配慮の合意形成を踏まえた目標を設定し、達成に向けて取り組んでいる。	3.2	3.3	3.7	3.7	個別の教育支援計画の新様式の導入にあたり、記入内容の検討、記入例の作成、留意点をまとめて校内で周知することができた。また本人、保護者の願いに加えて学校、家庭での本人の実態についてもまとめることができた。来年度以降、前籍校園からの引継ぎの仕方等を周知することで切れ目のない支援につなげていくことが課題である。	
	信 頼 に 応 え る 学 校 づ くり	個別の指導計画	(教務部) 年間指導計画 個別の指導計画(新様式検討) 明確な評価と見直し	「年間指導計画」に沿って、合理的配慮を踏まえた「個別の指導計画」の作成と見直しを行っている。	3.2	3.3	3.7	3.7	個別の指導計画新様式の導入にあたり、教務部で各学部への提案方法、記入内容の検討を行い、マニュアルを作成した。自立活動については、課題関連図を利用した中心課題の導き出し方のワークショップを行った。また、各教科については、学習指導要領から実態・段階・課題を導き出し、目標・手だてを考え指導計画の作成を各学年・各クラスで行った。来年度以降、年間指導計画を活用して個別の指導計画を立案できるように周知する必要がある。	
			(進路指導部) キャリア教育 キャリア教育発達段階表	個々の課題解決に向けてキャリア教育発達段階表を意識した授業を実践している。	3.0	3.1	3.4	3.4	児童生徒の生活が豊かで地域社会で活躍できることを目指して、キャリア発達段階表を意識して教育課程全体でキャリア教育を進めている。ワークキャリアでは、1月に中小企業家同友会に協力を得て行った「しごと体験フェア」は今まで知らなかった職種や仕事を体験することで、多様な仕事や働き方があることをことや自分の可能性を知ることができた。ライフキャリアの面では、学校在籍から地域社会の活動や生涯学習に繋がりそうな余暇活動に参加することが、将来児童生徒の生活が豊かなものになると考え、進路指導部だよりで地域の活動グループを紹介したり、兵庫県教育委員会が作成した「学びの場検索アプリ」を紹介したりした。	

【今後期待したい点】  
・考古博物館では、障害のある人の利用が増えてきており、ニーズの高まりを感じている。障害のある方に体験講座を受けてもらっても職員がどう接したら良いかわからないという声もある。豊かな生活を送るために、学校には積極的に働きかけてもらい、連携をお願いしたい。  
・兵庫県の特別支援学校には大学院内地留学生もいて、内部人材が豊富なはずである。外部人材活用だけではなく内部人材を研修会で活用する方法を考えてほしい。  
・小学部はボトムアップで丁寧に育てていく段階である。資料に「支援」という言葉がいっぱい書いてあるが、「支援」だけではいけない。学校は、指導する場所として、「支援」という言葉を出す過ぎると学校らしくないかもしれない。  
・「般化」について  
何を手がかりにするかといういろいろな変わっていき、その手がかりが社会の中に普通にある手がかりに近づけば近づくほど般化しやすくなる。評価と手がかりの評価の2つ考えるだけでも般化というよりはより具体的に考えられるようになる。般化を考えるポイントを絞り、子どもたちにとって「できた」がたくさん増えれば良いので、工夫をしてみようか。  
・第3学区 本校とペア校が通級指導を行っているが利用している生徒が少ない。もっとたくさんの人が学べるように、なりたいたい自分に近づけるような教育を普通高校で受けられる学校が地元にある。通級指導は必要なのではないかというところを学校に知っていただけたらいい。  
・福祉の面から東はりま特別支援学校とは連携ができていて、地域校と福祉は連携が取りにくい状況が起こっている実情がある。本校が率先してトライアングルプロジェクトを推進推奨してほしい。  
・SNSトラブルは卒業してからも多い。そこにいるだけで通報されることもあり、卒業生のことを知られていないというところを非常に痛感している。今いる生徒たちの持っているいろいろな力を是非地域に出向き、発揮できる場があったら良いと思う。地域の方と関わることでお互いが理解できると思う。学校から地域の中に出ていってほしい。  
・地域で行っている防災訓練を兼ねたイベントや瀬川川の清掃など東はりま特別支援学校の児童生徒も参加してほしい。  
・地域交流(居住地域交流等)の質を上げていってほしい。

16	進路指導 保護者支援	(進路指導部) 保護者向け進路研修会、見学会 進路懇談会(高)	福祉や労働などの関係機関やPTAと連携し、本人・保護者の願いに寄り添った継続的な進路指導に取り組んでいる。	3.3	3.4	3.3	3.3	保護者に対して、研修会や見学会の情報提供は昨年に比べて多くできた。また、高等部の個別懇談会では多くの懇談に参加し本人・保護者の願いに寄り添った進路指導ができた。	
17	進路指導 保護者支援	(進路指導部) 進路説明会 保護者懇談・相談	進路説明会等を実施し、早期より保護者に卒業後の生活に向けて情報提供ならびに意識啓発を行っている。	3.4	3.3	3.2	3.2	進路説明会だけでは必要な情報を正確・確実に伝えることは難しいと感じている。まずは高等部の教員が進路について保護者や生徒に必要な情報を伝えられるようになるために、職員への研修を充実させたい。また、わかりやすい資料作り、伝え方を検討したい。	
18	連携 (職員)	(各学部) クラス・学年・学部・学部長会・各種委員会による情報共有	児童生徒の個々の課題に対して、担任団・学年団・学部等で各会議をもち、情報共有を図っている。	3.3	3.4			各種の会議を定期的に開催し、児童生徒の個々の課題について情報共有を図り、指導、支援にあたることができた。	
19	信頼に 応える 学校づくり	センター的機能	(支援部・総務部) 公開研修会 オープンスクール 高校Coとのネットワーク会議 地域特別支援担当者会への出席 教育相談(就学前、小中高校への案内配布)	教育相談や研修会、各種連絡会により、他機関や地域の施設・学校との連携を深め、センター的機能としての役割を推進している。	3.1	3.3		(支援部) 研究研修部との協働で校内で実施していた教材展を地域の学校園の先生方にも参加していただくことができた。教育相談では、年間100件以上の相談に対応しており、医療、福祉等と連携して支援することもできた。知的障害、発達障害がある子どもで癇癪、暴言、落ち着きがないといった子どもの心や行動の問題、子どもに対しての接し方が分からない、つい怒鳴ってしまうなど育児に悩む養育者、支援者に対して子どもとの関係の強化や対応スキルを伝えていくことが課題である。	
20	情報発信	(総務部・情報部・各学部) 学校新聞 学部・学年だより PTA新聞 学校ホームページ・ブログ オープンスクールの実施	学校ホームページや紙面などの方法で効果的な情報発信を行い、地域や保護者に対して、本校教育への理解啓発を進めている。	3.2	3.4	3.4	3.4	(総務部) 月1回学校新聞を発行し、写真と月間行事予定で学校の様子を保護者に伝えることができた。オープンスクールはコロナ感染防止対策を行い人数制限を設けながらも年間5日間行うことができた。今後、日程等について児童生徒や職員の負担を考慮、検討していくことが必要である。 (情報部) ホームページの整理を行い、より見やすく変更することができた。 (各学部) 学部や学年・学級通信を定期的に発行し、保護者に児童生徒の学校生活の様子を知っていただくことができた。ホームページのブログでも児童生徒の活動の様子等を発信し、保護者や地域の方へ向けて本校教育への理解啓発を行うことができた。	
21	働きがいの ある 職場づくり	(管理職) 定時退勤日の推進 業務改善 授業支援システム	勤務時間の適正化に向け、業務改善や意識改革に取り組んでいる。	3.0	3.0			毎週水曜日が定時退勤日であることを、電子掲示板(Garoon)で周知し、退勤時刻を意識するように努めた。また、学校長主導の下、各学部、校務部に業務改善案の提出を依頼、年度をまたがり、継続して取り組んでいるものはその効果を検証するまでには至っていないが、対応策を考え、実施したのものについては効果が出ている。	
22	開 かれ つ な が る 学 校 づ く り	連携 (外部機関)	(支援部) 外部機関や専門家との連携 拡大支援会議 主治医訪問	児童生徒の個々の課題について、家庭・外部機関と協力・調整を図り、情報を共有して課題解決に取り組んでいる。	3.2	3.3	3.2	3.2	外部機関からOT、PT等を招聘して児童生徒の個々の課題について相談し、対応していくことができ、改善がみられるケースも多かった。関係機関と連携して対応する必要がある事例については拡大支援会議を開催し、対応の統一や情報の共有をすることで関係機関で足並みを揃えて支援をすることに繋がった。主治医訪問を効果的、効率的に進めていくために児童生徒の主治医に関する情報を整理、活用していくことを次年度に向けて始めている。
23	開 かれ つ な が る 学 校 づ く り	家庭との 連携	(総務・教務・支援部) 家庭訪問・個人懇談会 授業参観 教育支援計画・指導計画の手立ての合意形成	児童生徒の個々の課題について、懇談会等を通して保護者と確認共有し、課題解決に取り組んでいる。	3.3	3.4	3.4	3.4	(総務部・教務部) コロナ禍ではあったが、参観や懇談を行い、保護者と個々の児童生徒の課題について共通理解を持ち、課題解決に取り組んでいくことができた。 (支援部) より丁寧な合意形成を目指して、保護者向けに、新しい様式の個別の教育支援計画の作成、活用の流れについて新たに周知していくことが次年度の課題である。
24	新 型 コ ロ ナ 対 応	新型コロナ感染症 拡大防止対応	(保健部) 健康観察票の提出 感染防止対策の徹底(マスクの着用、手洗いの徹底) 施設設備の消毒 人との距離(ソーシャルディスタンス)の指導 給食指運(黙食)	新型コロナ感染症対応マニュアルに基づいた対応、保護者への情報提供を行っている。	3.4	3.5	3.6	3.6	日常の健康観察、マスク着用をはじめとした感染対策を家庭と連携を行いながら実施できた。保護者への情報提供も必要時に行うことができた。
25	新 型 コ ロ ナ 対 応	家庭学習 支援	(各学部) 家庭での学習課題の提供 電話による児童生徒の状況聞き取り	新型コロナウイルスによる臨時休業等に対応し、個別の学習課題を準備している。また、日頃から連絡帳や電話等により、保護者との連絡を密に行っている。	3.4	3.4	3.5	3.5	日々の連絡帳や電話により児童生徒の様子について情報交換を行っている。個々のニーズに応じ、必要な児童生徒には、担任が家庭学習の課題を用意している。
<p>今年度も昨年度と同様、Office365のFormsのアンケート機能を活用し、WEB回答を基本とした職員・保護者に学校評価を実施した。保護者の中には39メール未登録の家庭があるため、紙面とメールの両方で依頼をした。職員の回答率は、100%を達成した。保護者の回答率は、95.5%(令和3年度)から92.7%に低下している。WEB回答は、PCやスマートフォンからすぐ回答でき、多くの意見を反映できる手段であるが、匿名性が高く、督促をかけられないことが回答率の低下につながったと予測される。</p> <p>また、職員評価は、25項目中17項目昨年度より0.1~0.3ポイント上回り、保護者評価は19項目中4項目において0.1ポイント評価が上がっている。保護者評価については、「できている」「ややできている」を合わせると、ほぼ87%から95%と高評価を得た項目が多い。全体的に保護者評価の方が職員評価より高く、本校の教育活動に対して一定のご理解をいただいたと感じている。</p> <p>今年度は、オープンスクールや授業参観、東はりまフェスタなど、例年より規模を縮小しながらも実施できたこと、保護者に直接子どもたちの学校での様子を見ていただいたことが理解、評価につながったと考えられる。職員評価と保護者評価との差が見られた項目は、8項目あった。教育課程・授業改善、キャリア教育、個別の教育支援計画、個別の指導計画の4項目は、保護者評価の方が高かった。ICT活用については、保護者の注目度も高く、授業ではよく活用しているが、家庭でのタブレット端末活用につながっていないことが評価の差につながっているのではないかと考えられる。</p> <p>保護者記述欄の中には、保護者のニーズや児童生徒にとって必要性のある内容へのアプローチが向上した成果が読み取れる。職員・保護者とも評価の高かった項目については、自信を持って更に向上し、特に保護者評価との差が顕著な項目については謙虚に受け止め、どのように改善向上していくのか、また、校務部だけの検討に終わらず、改善するための対応策について、それぞれの学部学年で具体的な方針を話し合い、共有する機会として今回の結果を受け止めたい。どのような取組が児童生徒の成長や自立につながるのか、今後も課題と内容の検討を行い、児童生徒の自立と社会参加の一助に本校がなるよう次年度も教育活動に邁進していきたい。</p>									

令和4年度 学校評価 評価平均グラフ

